

いま、きみがここにいるしあわせを

1

夕暮れの人気のない初等部の校舎。もうみんな寮へ帰ってしまっているのだろう。誰もいないのが却って都合がよかった。

黒猫の仮面をかぶった棗は、重い足を引きずるように歩いていた。

仮面に空けられた穴から覗く廊下は、ひどく歪んで長く伸びているように見える。どこまで行っても終わりがこないかのような。

廊下は沈みかけた西日に照らされ、本来は白はずの壁が朱色に染められていた。

棗は大きく息をついて立ち止まった。身体の傷が痛む。両手、両足ともに未だ血がにじんでいた。その上、忌々しい制御面から流れる微量の電流が脳を刺激し、耳鳴りが止まらない。

かすかに、パタパタと足音がした。その音は、徐々に大きくなる。

誰かが近づいてくる。軽い足取りは大人のものではない。きつとクラスの奴らが居残りをしていたのか、忘れ物を取りに来たのかしたのだろう。

一瞬対応に迷った。

けれど、動くのも億劫なので、このままやり過ごすことにする。どうせこの面をつけているときには、クラスの連中は恐れて話しかけてなどこない。

棗は廊下の壁にもたれる。目を閉じて、足音が通り過ぎていくのを待つ。足音のリズムに合わせて鉄球で叩かれているかのように、ずきずきと頭が痛んだ。

けれど、その足音は、少し手前でびたりと止まる。

そして驚きの声が棗の耳に届いた。

「なつめっ!」

棗は目を開けた。彼も驚いたのだ。この声。高い、ソプラノの。

仮面に開けられた穴の向こう側に、少女が現れた。

彼のパートナーの少女。ツイントールに結わえられた髪が、夕日を浴びて、きらりと金に光る。

「棗、ちよお、どないしたん?! 大丈夫?」

蜜柑が驚いた顔で、自分の顔を覗き込んでいる。いつもよりさらに見開かれた大きな瞳には、心配と不安が浮かんでいた。

その視線が素早く両手首に向けられた。

「あんたケガしたるやん」

「……水玉かよ。どうしてここにいる」

「ウチ、算数の教科書忘れてもうて。宿題やらないとあかんから、取りにきたんよ」

「どんくせ」

思わず呟いた言葉に、蜜柑は眉をしかめた。

「どうせウチはどんくさいですよーだつ。大体、今はそんなこと言ってる場合じゃないやろ。誰か呼んできたるな」

蜜柑が走り出そうとするのを、腕を掴んで止めた。

「余計なことするな」

吐き出すように言うと、彼女の顔が歪んだ。

「余計って……! だつて、あんた、そのケガ!」

「いいんだよ、ブス」

「なーっ!」

蜜柑は頬を膨らませた。

「もう知らんわ。ウチは帰るから手、放してや」

口をへの字に曲げて、自分をにらみつける彼女。

どうしていつも、すぐにこうなるのだろう。彼女の言葉に腹が立ち、彼女を怒らせ、その瞬間しまったと思い、けれど引つ込みがつかなくなる。

だけど、今は。今だけは。

棗は蜜柑の腕を握る力を、ますます強くした。

「嫌だ」

「何なんよ、あんたはっ!」

蜜柑の怒鳴り声に、棗は思わず笑い出しそうになった。

本当に何なんだろうな。

ただ。

彼女がそばにいてくれると、頭痛がやわらぐ。嫌なことを忘れられる。ずっと、この陽だまりのような少女の隣にいられたら、と思ってしまう。願ってしまう。

「……しばらくここにいろ」

棗は蜜柑の腕を掴んだまま、座り込んだ。壁にもたれて、両足を投げ出す。

蜜柑はしばらくためらっていたようだったが、結局棗の隣に座った。棗と同じように壁にもたれると、彼はようやく腕を放した。

The Queen of Hearts

「ねえ、蜜柑ちゃんと日向君って付き合ってるの？」

転校生の言葉に、初等部B組の男の子たちは互いの顔を
見合わせた。

さあ、どうなんだろう？

1

転校生がやってきた。

クラスの男の子たちは、今度こそかわいらしい女の子が
来てくれるに違いないっ……！ と願っていたのだが、残
念ながら男の子だった。

がつくりと肩を落とした男の子たちに代わって、スマレ
を筆頭に女の子たちから悲鳴に近い歓声が飛ぶ。

鳴海先生の「転校生だよー」という声に、少し笑顔に
なり頭を下げた少年。通った鼻筋に、深い茶色の目。大人

びた表情の彼は美少年というわけではないけれど、十分に
女の子たちに騒がれるだけの容姿だった。

休み時間ともなれば、女の子たちが彼を取り囲み、初め
は反発していた男の子たちも、彼の気さくな人柄にいつし
か馴染んでいった。

そうして、彼がすっかりクラスの一員となったころ。

一人の少年が彼に話しかけた。

「いつも大変だなあ。パーマたちに追いかけて」

皮肉というより、心の底から同情しているような彼の言
葉に、転校生の少年は苦笑を浮かべた。

「うーん、でも好かれてるってことはうれしいよ」

おおく大人だあ、と周りの少年が感心する中、彼は続け
た。

「このクラスの女の子たち、みんなかわいいしね」

につこり笑った彼の周りで、どよめきが怒る。来年中
等部生……とはいえ、未だに恋愛経験には疎い初等部B組
の男の子たちなのだ。あつさりそんな台詞を言っただけ
の彼が奇妙に感じ、でも少しうらやましい。

「じゃあ、お前の好きな子っているの？」

また質問の声がかかる。

「そうだね、好きっていうか、気になる程度なだけけど」

転校生は考え込むように言った。

「蜜柑ちゃんってかわいいよね」

その一言に周りにいた男の子たちが仰け反った。

寄りよって佐倉かよ。

棗さんが怒るんじゃないか？

っていうか“蜜柑ちゃん”って名前を呼ぶなんて、いつの間になんか仲良くなったんだろ。彼女を名前で呼ぶのは逆を初めとする女の子たちと、最初から仲の良かった委員長と常に何事にも動じない心読み、そして棗さんだけだったのに。

周りの雰囲気と囁かれる棗の名前に、転校生は驚いて目を丸くした。

「え、でも別に蜜柑ちゃんと日向君って付き合っているわけじゃないよね？」

さあ、どうなんだろう？

男の子たちは一斉に考え込み、その視線は心読み君に集まった。

「えー、さあ、僕、知らないな。でも付き合っていないみたいだよ」

ははは、と心読み君は表情を変えずに笑った。

確かに付き合っていないようだ、というのはクラス全員の認識だった。

相変わらずあの二人は、「ブスでバカでどうしようもないな」「あんたかて、相変わらず性悪イヤミキツネやなあ！」という応酬を、飽きもせず毎日のように繰り返しているのだ。

全く色気の欠片もないやり取りだ。

もし恋愛関係にあるならば、あの日向棗が何にもしていないはずはないし、だとしたらもっとそれなりの雰囲気か二人の間にあつてもいいのでは。

みんな首をかきあげつつも、ではどういう風なのが“恋人同士”と言えるのか、よく分かってはいないのだけれど。

心読み君はにっこり笑ったまま。それ以上言う気はないらしい。彼をこれ以上問詰めても無駄だろう。

次に視線が向かったのは持ち上げ君。

いつも棗と一緒にいる彼ならば、何か知っているのではないか？

期待に満ちた周囲の視線に、彼は首をひねった。

「そもそも、棗さんって佐倉のことが好きなのか？」

この問いには、みんなが持ち上げ君に合わせて首をひねった。